はしがき

○本書は大學教養學部、乃至高等學校上級用テキストとして、文章軌範、唐宋八家文、古文眞寶、その他の書から、人口に膾炙した珠玉の篇を集めた。出來ることなら全部諳誦したいものばかりである。

○作品の排列は作者の年代順によつた。作者の小傳は頭註では無理な所があるので卷末に一括しておいた。

○註は最初簡單にするつもりであつたが、實際上の體驗から、あれもこれもと老婆心がすぎて、かへつて詳しいものになつてしまつた。勿論二人の分擔執筆で多少の繁簡を生じたが、一應問題になる所は互に充分檢討を加へた。通說の誤を正した所も少くない。歷史假名遣にしたのは送假名との關聯を考へたのである。新字體を用ひなかつたのも本文との關聯を考へたからである。

○註を詳しくした反面、送假名を省いたが、これは印刷の都合だけでなく、讀む力をつけるためにわざと省いたのである。漢文は讀むこと自體が一つの解釋に到達することであるから、充分考へてよまねばならぬのに、送假名があると問題點もそのまま素通りしてしまつて、どうも力がつかないからである。

○賦や辭の樣な韻をふんだ文には韻字に○或は△をつけ、これを交互に用ひて換韻を示した。

○本書の出版にあたつて快く御引受け下さつた武藏野書院主前田武氏の御厚意に對しては、衷心感謝の意を表したい。

昭和三十年六月中浣

編者識

目次

○はしがき……一
漁父辭……楚　屈　平……五
弔屈原賦……漢　賈　誼……六
秋風辭……漢　武　帝……七
伯夷列傳……漢　司馬　遷……八
座右銘……後漢　崔　瑗……一一
出師表……蜀漢　諸葛　亮……一三
博奕論……呉　韋　昭……一四
陳情表……晉　李　密……一七
蘭亭集序……晉　王　羲之……一九
五柳先生傳……晉　陶　潛……二〇
歸去來辭……晉　陶　潛……二三
桃花源記……晉　陶　潛……二四
春夜宴桃李園序……唐　李　白……二五
弔古戰場文……唐　李　華……二六
原道……唐　韓　愈……二八
送孟東野序……唐　韓　愈……三三
送李愿歸盤谷序……唐　韓　愈……三五
伯夷頌……唐　韓　愈……三七
雜說（上・下）……唐　韓　愈……三八
師說……唐　韓　愈……四〇
祭十二郎文……唐　韓　愈……四一
陋室銘……唐　劉　禹錫……四五
與元微之書……唐　白　居易……四五
始得西山宴游記……唐　柳　宗元……四八
種樹郭橐駝傳……唐　柳　宗元……四九
捕蛇者說……唐　柳　宗元……五〇

阿房宮賦……唐　杜　牧……三三
黄州竹樓記……宋　王　禹偁……三四
岳陽樓記……宋　范　仲淹……三五
畫錦堂記……宋　歐陽　修……三七
朋黨論……宋　歐陽　修……三九
袁州州學記……宋　李　覯……六一
名二子說……宋　蘇　洵……六五
愛蓮說……宋　周　敦頤……六三
獨樂園記……宋　司馬　光……六四
讀孟嘗君傳……宋　王　安石……六六
前赤壁賦……宋　蘇　軾……六七
後赤壁賦……宋　蘇　軾……七〇
留侯論……宋　蘇　軾……七二
潮州韓文公廟碑……宋　蘇　軾……七四
喜雨亭記……宋　蘇　軾……七八
超然臺記……宋　蘇　軾……七九
黄州快哉亭記……宋　蘇　轍……八一
上高宗封事……宋　胡　銓……八三
送東陽馬生序……明　宋　濂……八七
賣柑者言……明　劉　基……八九
敎條示龍場諸生……明　王　守仁……九〇
討粤匪檄……清　曾　國藩……九四
○作家小傳……九八

註校　中國歷代名家文選

漁父辭

楚　屈　平

屈原既放、遊於江潭、行吟澤畔。顏色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之曰、「子非三閭大夫與。何故至於斯。」屈原曰、「舉世皆濁、我獨清。衆人皆醉、我獨醒。是以見放。」漁父曰、「聖人不凝滯於物、而能與世推移。世人皆濁、何不淈其泥而揚其波。衆人皆醉、何不餔其糟而歠其醨。何故深思高舉、自令放爲。」屈原曰、「吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣。安能以身之察察、受物之汶汶者乎。寧赴湘流、葬於江魚之腹中、又安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎。」漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌曰、「滄浪之水清兮、可以濯吾纓。滄浪之水濁兮、可以濯吾足。」遂去、不復與言。

○漁父辭―辭は韻文の一體。ほぼ賦と體を同じくしてゐる。屈原、宋玉などのはじめたもの。漁父辭は漁父といふ假空の人物を設けて屈原がこれと問答する體にして自己の意をのべたものである。
○江潭―湘水のほとり。
○憔悴―やつれたさま。顦顇、癯瘁と同じ。
○形容―すがた形。
○枯槁―枯れ木のやうになつてゐること。
○三閭大夫―楚の王族である昭、屈、景三氏の譜屬を正し、その子弟を敎育する職。政治上の顧問にもそなはる。
○至於斯―史記には「而至此」に作る。
○淈―にごらす。
○餔―食ふこと。
○歠―ススル。飲むこと。
○醨―糟をしぼつたそのしる。薄酒。醲。
○聞之―これは古語であつたのであらう。荀子不苟篇にもこの語がある。
○察察―清潔なさま。
○汶汶―悶悶と同じ。うすよごれたさま。老子第五十八章に「其政悶々、其民淳々、其政察々、其民缺々」とある。
○皓皓―潔白清瑩のさま。皎皎と同じ。
○塵埃―史記には「溫蠖」に作る。溫蠖とすれば白と韻になる。溫蠖は心の亂れて呆然としたさま。塵埃はちりほこり。
○莞爾―につこり笑ふさま。
○枻―かぢ（楫）。林以正の箋解に船舷とあるのは誤であらう。枻には舷の意味はない。○滄浪之水清兮―この歌は孟子離婁篇にもある。滄浪は漢水の下流、均州武當縣にある。兮は音をそへるだけで意味のない字。もと南方楚の方言。○纓―冠のひも。

○弔屈原賦―賦は詩經と楚辭とに發源して漢代に完成流行した散文的韻文で、歌はずして朗誦する所が詩と異つてゐる。弔屈原賦は長沙王の大傅に左遷された賈誼が、赴任の途次湘水を過ぎ、屈原投身の故事に感じて賦を作り、以てその靈を弔ふと共に、自己の悲境を屈原に喩へたもの。

○嘉惠―天子のよきめぐみ。長沙王の傅に貶せられたことを怨みとせず、かく言つたのである。

○長沙―洞庭湖の南、湘江の東岸にある地名。今は湖南省の首都。

○湛汨羅―汨羅は湘水の支流、湘水は湖南省湘陰縣（長沙の北方）を流れて洞庭湖に入る川。湛は沈む。

○湘流―湘水。

○罔極―罔は無、極は中正の道。

○鸞鳳―鸞も鳳も瑞鳥。君子正人にたとへる。

○鴟鴞―ふくろふ。小人邪佞にたとへる。

○闒茸―不才不肖の人。

○倒植―植は立。音チ。

○隨夷―卞隨と伯夷。伯夷列傳註參照。

○跖蹻―魯の盜跖と楚の莊蹻。共に古の大盜人。

○莫邪―吳の寶劍の名。

○生之亡故―生は屈原先生。故は理由。先生の故無くしてこの難にあへることよ。

○斡棄―ころばしすてる。

○周鼎―周國相傳の寶鼎。

弔屈原賦

漢　賈誼

恭承嘉惠兮、俟罪長沙。仄聞屈原兮、自湛汨羅。造託湘流兮、敬弔先生。遭世罔極兮、迺隕其身。烏虖哀哉兮、逢時不祥。鸞鳳伏竄兮、鴟鴞翺翔。闒茸尊顯兮、讒諛得志。賢聖逆曳兮、方正倒植。謂隨・夷溷兮、謂跖・蹻廉。莫邪爲鈍兮、鉛刀爲銛。吁嗟默默、生之亡故兮。斡棄周鼎、寶康瓠兮。騰駕罷牛、驂蹇驢兮。驥垂兩耳、服鹽車兮。章甫薦屨、漸不可久兮。嗟苦先生、獨離此咎兮。諺曰「已矣國其莫吾知兮、子獨壹鬱其誰語。鳳縹縹其高逝兮、夫固自引而遠去。襲九淵之神龍兮、沕淵潛以自珍。偃蟜獺以隱處兮、夫豈從蝦與蛭螾。所貴聖之神德兮、遠濁世而自臧。使騏麟可羈而羈兮、豈云異夫犬羊。般紛紛其離此郵兮、亦夫子之故也。歷九州而相其君兮、何必懷此都也。鳳凰翺于千仞兮、覽德輝而下之。見細德之險徵兮、遙

○康瓠―大きなふくべ。或はいふ、空のふくべと。

○章甫―もと殷の冠の名。

○薦屨―屨（麻で作つたくつ）にはく。

○漸不可久―漸は猶漸。ただぐづぐづとしてながゐすべきでない。

○嗟苦―苦は若に改むべきであらう。嗟若は歎辭。ああ。苦ならば「いたましいかな」とよむ。

○諺―楚辭の「亂」と同じく歌の終りの章。

○壹鬱―怫鬱に同じ。憤りが胸中にふさがること。壹は史記に湮に作る。

○縹縹―輕くあがるさま。

○淵潛―ふかく、かくれひそむ。

○偃蟜―蟜は水蟲。蛇に似て四足あり、人に害を加へる。獺はかはをそ。

○蝦―えび。

○蛭螾―ひるとみみず。

○偃―そむく、背をむける。

○獺―獺は獺に同じ。

○臧―善、上文の珍字と對する。

○般―音班、班は反なり。五臣注文選盤に作る。或はいふ、斑なりと、斑は亂るる貌。又云ふ、久なりと。

○郵―尤（とがめ）なり。

○夫子之故也―故は史記に辜に作る。

○荊・揚・豫・梁・雍の九州。即ち中國全土の意。

○其君―德ある名君。

○此都―楚國の都、郢。今の湖北省江陵縣の西北。

○九州―冀・兗・青・徐・人。

○險徵―史記は徵を徵に作るも、文選によつて徵とした。奸險の徵證。あぶないきざし。

○細德―無德の增擊は空高くはばたくこと。

○汙瀆―たまり水と小溝。小人のはびこる楚の朝廷にたとへた。

○增擊―增は層に通ず。高いといふこと。大魚。大人物即ち屈原にたとへる。

○鱣鯨―ふかとくぢら。所謂呑舟の魚である。

○呑舟之魚―舟をも一呑みにするやうなには蟻蛻に作る。蛻は下平の虞韻で、前の呑舟之魚の魚は下平の魚韻で、二韻は通用するから、韻から考へると蟻蛻に作る方がよい。

○秋風辭―漢の武帝が河東郡に行幸して地の神を祀つた時、汾水に船をうかべて作つたもの。漢書武帝紀によると帝の行幸は元鼎四年（前一一一三）十月のことで、帝は時に四十六歳であつた。

○河東―郡の名。黃河の東岸の地方で、今の山西省の南部。

○后土―地の神。

○帝京―みやこ。ここでは長安。

○飲燕―燕は宴に同じ。さかもり。

○佳人―美人の義であるが、ここでは群臣をさしていふ。

○樓船―やぐら船。

○汾河―山西省中部を南流して黃河に入る川。

○發棹歌―棹（かぢ）をたたいて歌をうたふ。

秋風辭

漢　武帝

上行幸河東、祠后土。顧視帝京、欣然。中流與羣臣飲燕。上歡甚。乃自作秋風辭曰「秋風起兮白雲飛、艸木黃落兮鴈南歸。蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘。泛樓船兮濟汾河、橫中流兮揚素波。簫鼓鳴兮發棹歌、歡樂極兮哀情多。少壯幾時兮奈老何。」